

研究論文

「物語り」のプロセスに関する臨床心理学的考察

— 話し手と聞き手の相互作用に着目して —

平 井 有 美

Yumi Hirai

1. 問 題

1-1 「物語り」の機能とは

臨床心理面接の「話す」と「語る」について、坂部（1990）は、「＜はなし＞の方がより素朴、直接的であり、それに対して＜かたり＞のほうは、より統合、反省、屈折の度合いが高く、また日常生活の行為場面から隔絶、遮断の度合いが高い」と述べている。また土居（2007）は臨床心理面接の面接者の聴き方に対して「患者は、時間的前後関係におかまいなしに話をすることが多いが、面接者は聞いたことを時間内に配列し直して、それをストーリーとして聞かなければならない」と述べている。このことから、話し手の＜かたり＞は話し手の捉え方が大きく影響しており、この＜かたり＞を「物語り」と捉えることができると考えた。ここでは話し手が自分自身の経験を聞き手に語ることを「物語り」と定義し、箱庭や神話などのイメージやファンタジー的側面は含まないとする。

「物語り」には様々な機能があるとされている。1つ目は筋道を立てる機能である。やまだ（2000）は「物語り」を「二つ以上の出来事を結び付けて筋立てる行為」と定義している。話し手が「物語り」を言葉にしていく過程でどのように構成するか筋道を考えていくことで、改めて「物語り」を整理することができるようになる。また、森・福島（2007）は「人は語ることを通して過去・現在・未来の整合性を確認する作業を行う」働きがあると述べている。「物語り」を時系列に沿って秩序立てて語ることで、話し手の過去から現在、未来へと一貫した存在として繋いでいくことができる。このことから、出来事

と出来事を繋ぎ合わせて1つの「物語り」にする筋道を立てる機能があると考えられる。

次に、内省する機能である。河合（2002）は、「人間は自分の経験したことを自分のものにする、あるいは自分の心に収めるにはその経験が自分の世界観や人生観の中にうまく組み込む必要がある」と述べている。また榎本（1999）は「自分自身の過去経験を一定のまとまりをもって構成することでアイデンティティを保証し、どのように自分が生きていくのかという人生の意味の発見が行われる」と述べている。このことから、「物語り」を構成することにより、経験を自分のものとして取り込むことができるようになることで、アイデンティティが明確になる働きがあると考えられる。そのため、自分自身について改めて考えるという内省する機能があると考えられる。

3つ目として、意味づけを変化する機能である。榎本（1999）は自分自身が危機に瀕したときに新たな「物語り」を作り直す必要があることを指摘し、新しい「物語り」を創造することで危機に対処することができる」と述べている。そのため過去の経験の意味づけや解釈に変更や修正をすることができる」とされている。先ほど内省する機能では、経験を人生に組み込むため「物語り」を構成することが必要だと述べた。しかし、受け入れがたい経験などは「物語り」としても語られにくい。ネガティブに捉えられている経験は「物語り」として編集したり再構築することで意味づけを変化させ、自分自身の一部として組み込むことができるようになる。このように新しい「物語り」を創造することで語りが変化する。

そのことについて矢野（2000）は「語り方の変容は自己の変容に結びつく」と述べ、語りの変容からアイデンティティの変容が起きることを明らかにしている。このことから、「物語り」を編集し構成を変えて新たな「物語り」へと再構築することで、過去の経験の意味づけを変化する機能があると考えられる。

以上のことから、“筋道を立てる機能”、“内省をする機能”、“意味づけを変化する機能”の3つが「物語り」の機能として明らかになっている。

1-2 「物語り」と聞き手の役割

「物語り」には話し手と聞き手の二者関係で成り立っている。話し手と聞き手の相互作用により「物語り」の機能が働くすると聞き手となる他者が「物語り」によって重要な役割を果たしていると考えられる。そのため、この節では「物語り」における聞き手の役割について述べていく。

やまだ（2000）は『「自己」は個人の内側に閉じたものと存在するのではなく、他者を媒介とし、他者に向かって物語られる『物語』として存在する』と述べている。このように、聞き手の存在が「物語り」を生成するきっかけになることを示唆している。また、やまだ（2000）は「語る相手によっても、場の雰囲気や状況によっても影響される」と述べており、聞き手の外から読み取れる情報や地位や立場などの二者の関係性が話し手の「物語り」に影響しているとした。そのため、聞き手が話し手の「物語り」を生成するきっかけであり、聞き手の外見や立場などの要因は「物語り」を促進する場合もあれば抑制する場合もある。

そこで聞き手は、話し手と関係性を築く必要がある。河合（2002）は「治療者はクライアントと水平な位置にいないてはならない」と述べ、そのためには、クライアントが「物語り」を構成できる雰囲気をつくることが大切であるとした。田中（2016）も同じく「クライアントの物語を聞くセラピストの役割や、物語を共有する両者の関係性が重視される」として

二者関係性の重要性を述べている。そのため、聞き手の役割として関係性をつくることが重要になると考えられる。

また、「物語り」を共有することが「物語り」の機能として話し手にとって重要な体験であるとされている。稲本ら（2001）は自己変容に関して、「聞き手の存在により自己の経験を言語化するという過程を経て、聞き手が自己物語を聞き、共有しているという状況における一致性、または共有体験の理解を得られたという確信がさらに自己概念の明確化を強化している」と述べている。同じく野村（2014）は、「クライアントの『内なる語り』が『外なる語り』として表出されると、出来事が言葉を得て、さらに他者に開示される過程で、再帰的に『内なる語り』に影響する」と述べている。このように、聞き手が「物語り」を共有し理解することが話し手にとってアイデンティティを明確にする体験になっている。

以上のことから、「物語り」の聞き手の役割として“関係性を築くこと”、“「物語り」を共有すること”が聞き手の役割として明らかになっている。

1-3 「物語り」のプロセス

これまで、「物語り」の機能と、聞き手の役割について先行研究で明らかになっていることを述べてきた。まとめると「物語り」は話し手と聞き手の二者間の間で行われる相互作用である。そして、「物語り」のプロセスの中で働く機能には大きく分けて3つあり、“筋道を立てる機能”、“内省をする機能”、“意味づけを変化する機能”であった。そして、「物語り」には聞き手の存在が重要であり、聞き手の役割として、“関係性を築くこと”、“「物語り」を共有すること”が明らかになっている。

先行研究から「物語り」の機能や、聞き手の役割は明確になっていが、話し手と聞き手との相互作用については明らかになっていない。そのため本研究では「物語り」のプロセスの中での相互作用について明らかにすることが重要であると考えた。そこで、本研究ではまず「物語り」のプロセスがどのように

進んでいくのか、そして聞き手の役割がどのように働くか明らかにする。その後、「物語り」のプロセスの中でどのような相互作用があるのか明らかにしたいと考えた。

2. 目的

過去のエピソードを話し手と聞き手の二者間で語ることを「物語り」と定義し、「物語り」がどのようなプロセスを辿るのかを明らかにする。そしてそのプロセスの中でどのような二者関係の相互作用があるのかを明らかにすることを目的とした。

3. 方法

3-1 調査協力者

調査協力者は、大学生計19名であった。調査協力者の性別の内訳は男性5名、女性14名であった。平均年齢は20.74歳（範囲19-29）であった。

3-2 実施日時

本調査は2018年8月2日から10月26日にかけて行われた。

3-3 調査方法

調査協力者に、調査開始時に口頭で説明し合意を得た後、同意書を書いてもらった。その後、「物語り」場面を設け、「物語り」場面についてインタビューを実施した。

「物語り」場面では、「過去の学校生活のことについて話していただきます。話していただく内容は中学校・高校・大学の1番心に残っていることについてです。時間はそれぞれ5分程度話していただきたいと思いますが、短くなっても長くなってもかまわないので時間はあまり気にしないでください。今から3分間ほど時間をとるので中学校、高校、大学の1番心に残っていることを思い出してみてください」と教示し、3分間考える時間を設けた。その後、「中学校で1番心に残っていることはなんですか?」と教示し、心に残っていることについて中学校、高

校、大学ごとに教示を行った。聞き手は話し手の語られる内容が明確になるように適宜質問を行った。

インタビューでは、「今先ほど話をさせていただいた、中学校・高校・大学の1番心に残っている学校生活について私に話していたときのことを振り返りながら質問に答えてください」と質問し、「物語り」場面を振り返って質問に答えてもらった。質問項目はTable1に示した。

Table1 インタビュー項目

「物語り」の機能について (中学校・高校・大学)	・話をしているどのような感じがしたか ・話をしているときの気持ちについて ・話しやすさ/話しにくさについて ・思い出しやすさ/思い出しにくさについて
話しやすさ	・中学校・高校・大学どのうちどれが一番話しやすく、話しにくかったか
思い出しやすさ	・中学校・高校・大学の話のうちどれが一番思い出しやすく、思い出しにくかったか
気持ちの変化	・過去の学校生活の話をする前後の気持ちの変化について
聞き手との関係性	・過去の学校生活の話をする前後で、聞き手の印象や距離感の変化について

3-4 倫理面の配慮

調査は協力者の同意に基づいて行い、調査についての同意書を用いて、プライバシーの保護や論文上でのデータの取り扱い、調査を中断できることを説明した。また、ICレコーダーによる録音にも調査協力者の許可を取った上で行った。

3-5 分析の手続き

インタビューの分析にはグラウンデッド・セオリー・アプローチ（Grounded Theory Approach：以下GTAと略記）の一つである修正版グラウンデッド・セオリーアプローチ（Morified Grounded Theory Approach：以下M-GTAと略記）を用いた。M-GTAは木下（2007）の分析方法を参考にした。

作成したインタビューの逐語録からM-GTAの分析手続きに基づき、分析ワークシートを用いて概念を生成した。分析ワークシートには、概念名、その定義、具体例であるヴァリエーション、理論メモの項目がある。分析作業の流れとしては、分析テーマ

と分析焦点者に関連がある箇所に着目し、それを1つの具体例とし、他の場合も説明できそうな概念を考えていった。本研究での分析テーマは、『「物語り」がどのようなプロセスを辿っていくのか』を調べるため、『「物語り」のプロセス』と設定した。分析焦点者は「過去の学校生活について語り、その後インタビュー調査に参加した大学生」とした。

分析ワークシートごとに新たな概念を生成すると同時に生成した概念の他の具体例を追加した。なお、具体例が少ない概念は有効ではないと判断した。

以下に本研究の分析で得られた概念のひとつである〈「物語り」の広がり〉を例に、概念の生成過程を例示する（以降、概念を〈〉、定義を“”で表記）。分析テーマに関連する箇所 L6「なんか部活のことだったんですけど、そのやっぱ3年間を通しての部活だったんで、話しているうちにこれ話そうと思ってたこととは追加で色々話したいことが出てきてそういうのも追加で色々話せたかなって思います。」という部分に着目した。これは、「物語り」を言葉することでエピソードに関連した話が繋がっていくことを示している。そのため、「物語り」の機能である〈「物語り」の広がり〉という概念を生成し、定義を“話し手の中でエピソードが繋がっていく”とした。(Table2)

4. 結 果

4-1 各カテゴリーを構成する概念

M-GTAの分析により、15の概念が生成され、8つのサブカテゴリーから2つのカテゴリーに分けられた。ここでは、カテゴリーを構成するサブカテゴリーと概念の関係を説明する。概念の定義と具体例を示したものをTable3に示した（以降カテゴリーを【】、サブカテゴリーを《》で概念名を〈〉で表記）。

【話し手の中のプロセス】カテゴリー

【話し手の中のプロセス】とは、「物語り」を構成する話し手の中で辿っていくプロセスである。【話し手の中のプロセス】を時系列に沿ってサブカテ

Table2 分析ワークシート例（一部を抜粋）

【概念名】「物語り」の広がり
【定義】話し手の中でエピソードが繋がっていく
<p>【ヴァリエーション（具体例）】</p> <p>C14「話やすさは色々言ったので話にまとまりがないなと思って、自分でも。まあ、でも色んなことがあって色んなエピソードができたので話しやすいは話しやすい。なんか、いくらでも出てくるだろうなって。」</p> <p>F9「うーん。なんか初めは全然高校の話について、一番初めに考える時間あったじゃないですか。全然何も思い浮かばなかったんで、何してきたかなみたい。本当になにも。無だったんで、で、結局ちょっとその中学の話が先にあったんで、その話している途中に思い浮かんだんで、でも高校はこうだったなみたい。こういう感じのことが話しているうちに思い浮かんだんで、なんかつなげる感じで関連付けるじゃないですけど。」</p> <p>H15「その話も今日は特にするつもりはなかったんですけど、あつ話しちゃったみたい。笑（中略）話している中で自分の中では言っちゃったなって、さっきも言ったんですけど、あ、言っちゃったなって感じがありました。」</p> <p>L6「なんか部活のことだったんですけど、そのやっぱ3年間を通しての部活だったんで、話しているうちにこれ話そうと思ってたこととは追加で色々話したいことが出てきてそういうのも追加で色々話せたかなって思います。」</p>
<p>【理論的メモ】物語り自体が主体になる まとまりがなくなってくる反面、整理される場合もある 横に広がる感じ</p>

* アルファベットは対象者、数字は発言の順番を表す

リーで詳しく説明していく。

①《話題の選択》サブカテゴリー

話し手は「物語り」を構成する前に《話題の選択》を行う。《話題の選択》では、〈エピソードの要因〉と〈言語化のしにくさ〉を踏まえて適切なエピソードを選択する。

〈エピソードの要因〉は、エピソードの内容によって思い出しやすさや話しやすさが異なることである。いくつものエピソードの中から内容を考慮して適切なエピソードを選択していく。また、話し手の中でネガティブに捉えられているエピソードは言葉にしづらく、語りにくさを感じていた。

このことから、〈エピソードの要因〉が〈言語化のしにくさ〉に影響を与えていると考えられる。この〈言語化のしにくさ〉には、「物語り」を言語化すること自体に苦手意識がある場合があると内容によって他者に伝えることへの抵抗がみられる場合があった。このように「物語り」を言葉にすることに困難さを感じながら、エピソードを選択して《話題の選択》を行っていた。

②《筋道を立てる》サブカテゴリー

《筋道を立てる》とは、話し手がエピソードを言葉にすることで「物語り」を構成する段階である。この段階では、エピソードだけでなくその時の感情や思想などが思い出され、「物語り」がより具体的になる（〈「物語り」の広がり〉）。より具体的になった「物語り」を現在の話し手が改めて捉え直し、感情や考えが整理されていく。そして整理されることで新たな気づきや考えが生まれる。

このように、明確になったエピソードの全体像をまとめて整理することで、「物語り」を構成していくことができる。

③《内省》サブカテゴリー

《内省》とは、構成された「物語り」を改めて振り返り、話し手が現在の自分について考えることである。まず、エピソードを共有することで、当時の気持ちを聞き手と共有することができる。そして、現在の話し手がその時の気持ち再体験することで、改めて「物語り」の中で《内省》が行われる。また、構成された「物語り」から過去の自分と現在の自分について考えるきっかけとなり〈アイデンティティの再確認〉が行われた。

〈エピソードの共有体験〉により話し手が当時の気持ちを振り返り聞き手と共有することができるが、話し手にとってネガティブなエピソードは気持ちの再体験を回避するために語ることを避ける場合もみられた。このように、〈エピソードの共有体験〉はエピソードが話し手にとってネガティブであったり、話し手と共有する不安が《内省》の妨げになる可能性もあると考えられる。

④《意味づけの変化》サブカテゴリー

《内省》し、「物語り」を改めて振り返ることで話し手の中でエピソードの意味づけが変化することがある。このことを《意味づけの変化》とした。「物語り」を構築する際に以前とは異なった捉え方ができ、気持ちに折り合いがつけることができるように

なる。《意味づけの変化》が生じると話し手は新たな「物語り」を創造することができるようになるのである。

⑤《気分の変化》サブカテゴリー

「物語り」を語っているときや、語り終わった後に《気分の変化》が起きる。この《気分の変化》には、〈現在の自分の捉え方の変化〉と〈カタルシス効果〉の2種類に分けられた。

まず、〈現在の自分の捉え方の変化〉とは、過去、現在、未来の自分の捉え方が変化するものである。「物語り」の自分の経験から励まされたり、後悔を抱くことがあった。また、先ほど説明した《意味づけの変化》が機能する場合にも〈現在の自分の捉え方の変化〉が生じた。《意味づけの変化》が起きるエピソードは、ネガティブなエピソードに対して生じることが多かった。

次に〈カタルシス効果〉は「物語り」を語ることの行為により気持ちが変化することである。「物語り」を語り切った満足感や上手く言葉にできなかった不満感によって気持ちの変化が生じた。

【関係性の中のプロセス】カテゴリー

次に、「物語り」の中で話し手と聞き手との相互作用がどのように行われていくか【関係性の中のプロセス】について時系列に沿ってサブカテゴリーについて説明していく。

⑥《聞き手の影響》サブカテゴリー

話し手は、聞き手となる他者を意識して「物語り」の《話題の選択》を行っていく。そのとき、聞き手の地位や聞き手との関係性など〈聞き手の特徴〉から適切な《話題の選択》を行う。「物語り」を語り始めると聞き手に対して〈評価される感覚〉を意識するために語ることに不安や緊張感を抱くことがある。「物語り」の最初のプロセスである《話題の選択》において、特に初対面や関係性が築けていない状態だと話し手に《聞き手の影響》が強く意識されると

いえる。

⑦《「物語り」の共有》サブカテゴリー

話し手は「物語り」を語り始めると、聞き手の相槌や質問によって二者関係の中に〈言葉にする安心感〉が生まれる。聞き手が肯定的に傾聴することで安心した空間を作ることで話し手が「物語り」を言葉にしやすくなる。

また、話し手が〈言語化のしにくさ〉を感じている場合、聞き手が〈言語化の補助〉を行い一緒に「物語り」を構成することができる。そのため、〈言葉にする安心感〉を与えたり〈言語化の補助〉を聞き手が担うことで「物語り」を深めていくことができる。

⑧《関係性を構築》サブカテゴリー

《「物語り」の共有》体験が得られると「物語り」を共有することによって話し手と聞き手の関係性が構築される（《関係性の構築》）。「物語り」のプロセスの最初に感じていた不安感から共有体験を経て安心感に変化する。そのため、聞き手に対する評価も変化し〈印象の変化〉や〈距離感の変化〉が起きる。

4-2 サブカテゴリーの流れ

次に、分析によって示された【話し手の中のプロセス】と【関係性の中のプロセス】のカテゴリーがどのように影響しあいながら「物語り」のプロセスを辿っていくのか説明する。(Figure1)

まず、話し手は聞き手の存在を意識した《話題の選択》を行い、適切なエピソードを選択をする。「物語り」が言葉になる前段階の《話題の選択》から、《聞き手の影響》を受けエピソードを選択していく。

そして、適切なエピソードが選択されると話し手が「物語り」を言葉にし始める。言葉にし始めるとエピソードの全体が明確になり、整理しながら「物語り」の構成を立てていく。

聞き手はこの「物語り」を相槌や聞き返しを行ないながら理解しようとする。この理解しようとする行動が、話し手に安心感を与える。また、話し手が「物語り」を語るときに言語化に困難を感じる時がある。そのときには、聞き手の〈言語化の補助〉の役割が重要になる。言語化のしづらさを感じている話し手が聞き手の質問に答えることで徐々に自分の言葉で「物語り」を組み立てることができるようにな

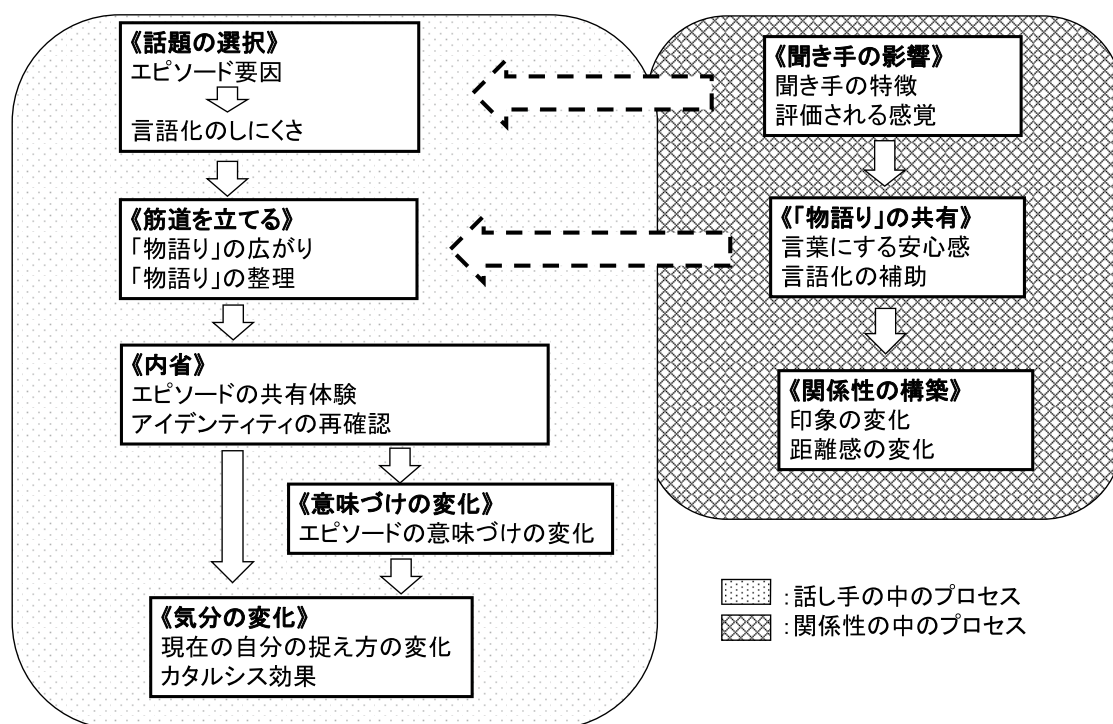


Figure1.結果図

Table3 概念リスト

話し手の中のプロセス	①話題の選択	エピソードの要因	「物語り」の内容により思い出しやすいや話しやすさが異なる	H8「最初のときに自分が考えてた中で何を言おうかなって思ってたんですけど、なんかあまり自分のマイナスな面だったんで、それをちょっとというのはなっているのもちょっとだけは躊躇ったんですけど、話していく中ではすんなり話せてたと思うので。」
		言語化のしにくさ	話し手が「物語り」を言葉にして伝えることに困難さを感じている	A13「抵抗があるとかはないんですけど言葉が出てこないから（笑）なんだろう。学力が足りてない感じが言葉の語彙力のなさか」
	②筋道を立てる	「物語り」の広がり	話し手の中でエピソードが繋がっている	L6「なんか部活のことだったんですけど、そのやっぱ3年間を通しての部活だったんで、話しているうちにこれ話そうと思ってたこととは追加で色々話したいことが出てきてそういうのも追加で色々話せたかなって思います。」
		「物語り」の整理	話し手が「物語り」を言葉にすることでまとまりをもつようになる	F1「えっと、あの話始める前は結構なんか何話そうかなとか結構色々頭の中で考えを巡らせてたんですけど、口に出してこう話していると結構なんか考えがまとまってくるというか頭がすっきりしてくるんで、話始めると話しやすかったかなって感じがですね。」
	③内省	エピソードの共有体験	聞き手と「物語り」を共有し当時の気持ちを再び体験する	E2「えっと、楽しかったことを共有しているような。こっちも思い出して楽しくなるような感じがしました。」
		アイデンティティの再確認	現在の自分と当時の自分を比較する	K6「あんまり良いことばかりでもなかったんで。まあでもそれが今の自分を作っているのかなっていうのは中学の三年間は人格形成じゃないですけど自分の中の自分ってどういうのっていうのをすごい固めれた時期だと思うんで、すごい自分頑張ったなっていう感じです。」
	④意味づけの変化	エピソードの意味づけの変化	エピソードと距離を取ることにより意味づけが変化する	A11「なんかその引退決まったっていう話やったけど、そのときはだいぶずーんって凹んでんだけど、今はもう全然楽しい良かったなみたいな話で、楽しいプラスの気持ちで思い出せる気持ちがしました。」
		現在の自分の捉え方の変化	過去、現在、未来の自分に対して生じる気持ちの変化	S20「なんか、あんなに頑張ってたっていうかあんだけやってた自分を裏切ってる気持ちにもなるんですよ。なんか楽しんでるけど、なんかうーん。過去にやっぱり申し訳ないとか。」
関係性の中のプロセス	⑤気持ちの変化	カタルシス効果	「物語り」を言葉にできたことへのすっきり感と言葉にできないもやもや感を感じる	J27「話しきったなっていう感じ。（中略）泣いた後じゃないけど、そういう感じのすっきりした感じがあります。」
		聞き手の特徴	聞き手の特徴や関係性によって話しやすさが変化する	F23「なんかやっぱ初対面の方なんで、なんかどこまでを話せばいいのかなって結局迷ったあげく、すごいディープな話をしてしまったんですけど、それはそれでいいのかなみたいな。」
	⑥聞き手の影響	評価される感覚	聞き手の評価を意識するため不安感を抱いている	F26「うーんやっぱ初めはなんかやっぱ初対面の方なんで、話せたっちゃ話せましたけど、それについてやっぱどう思っているんだろうっていうのはやっぱずっと思っはいて。」
		言葉にする安心感	聞き手の相槌や質問により話しやすくなる	L46「すごい積極的に質問してくれたのすごく話しやすいなって思いました。相槌とか、話終わったら結構質問とかしてくれたんで、自分のことをもっと話すことができたと思います。」
	⑦「物語り」の共有	言語化の補助	聞き手が一緒に「物語り」を構成する	A20「やっぱ話がまとまんないからこう自分で組み立てるのが難しいんで、質問してもらった方が答えて、質問して答えてっていう感じがやりやすかったです。」
		印象の変化	「物語り」により聞き手の印象に変化が表れる	E23「こういう人なんだなってわかった感じがですね。なんかあんまり印象、最初には何も思ってたのが色々な印象が付いていったっていう感じです。」
	⑧関係性の構築	距離感の変化	「物語り」により聞き手との距離感に変化が表れる	N56「やっぱり緊張は多少はほぐれました。し、多少は楽しい気持ちも出てきたかなって話して。やっぱり、話してて、こう今も話しているじゃないですか？だからちょっと距離縮まったかなみたいな。」

る。このように、話し手と聞き手が「物語り」を共有することで「物語り」をより深めていくことができる。

そして、「物語り」を深めていくことで、《内省》が行われる。聞き手と「物語り」を共有したことにより当時の気持ちを再体験したり、アイデンティティの再確認が行われることで「物語り」から自己に対して改めて考えるきっかけになる。この《内省》により「物語り」の意味が考えられ、人生の中に新たな経験が位置づけられる。

そして、その「物語り」が過去とは別の新しい意味づけがされると《意味づけの変化》生じる。《意味づけの変化》は、「物語り」に対する話し手の解釈が変化することである。しかし、《意味づけの変化》は必ずしも生じるわけではない。元々のエピソードの捉え方や「物語り」の深まりの程度によっても変化すると考えられた。

このような「物語り」のプロセスを経て、話し手に《気持ちの変化》が生じる。気持ちの変化にはポジティブな変化やネガティブな変化がみられたが、それは〈現在の自分の捉え方の変化〉や「物語り」を語ったことの〈カタルシス効果〉によって変化したと考えられる。そして、「物語り」のプロセスを経て話し手は印象や距離感の変化を感じ、聞き手との《関係性の構築》が見られた。

以上のことから、【話し手の中のプロセス】と【関係性の中のプロセス】のカテゴリーに分けて考えたが、聞き手が話し手の「物語り」のプロセスに大きな影響を与えており相互に影響し合っていることが明らかになった。

5. 考 察

M-GTAによって、「物語り」のプロセスが明らかになった。本研究ではカテゴリー別に【話し手の中のプロセス】と【関係性の中のプロセス】を明らかにしたが、両者は相互に影響し合い、話し手の「物語り」には聞き手の存在が大きく影響していることが示唆された。M-GTAから明らかになった結果図

を踏まえ、話し手と聞き手の相互作用に重点を置いて考察する。

5-1 《話題の選択》と《聞き手の影響》

話し手は、「物語り」を言語化する前から、聞き手を意識しながら《話題の選択》を行っていた。千田（1987）は二者間の会話の中で言葉だけが伝わっているのではないと述べており、具体的には「話の動機や目的」以外にも「話し手の体格外見や性格、立場や教養や経験」などの言葉に関係しないものが「物語り」に影響していると述べている。その他にも、野村（2016）は心理療法の語りについてクライエントとセラピストや両者に内在する要因によって修飾を受けると述べている。このように、外的要因が「物語り」に影響していることが明らかになっている。そのため、「物語り」が構成される前の《話題の選択》で話し手と聞き手の相互作用が生まれていると考えられる。このことから、「物語り」が言葉になる以前から聞き手という存在が話し手の中の「物語り」に影響していると考えられた。以上のことから、「物語り」における二者間の相互作用は言葉のやり取りをする前から影響し合っていることが明らかになった。

5-2 《筋道を立てる》と《「物語り」の共有》

次に話し手と聞き手の言葉を介した相互作用について考察する。話し手は「物語り」を構成し《筋道を立てる》。筋道を立てる段階は、「物語り」の働きの中の1つである。「物語り」を構成する中で重要な役割である。しかし、「物語り」を語るときに〈言語化のしにくさ〉を感じる場合があった。この〈言語化のしにくさ〉には《筋道を立てる》働きを妨げることがある。

〈言語化のしにくさ〉には個人の特徴と《聞き手の影響》によるものがあった。個人の特徴とは、自分の内面を言葉にしにくいと感じているということである。高石（2009）は現代の「物語り」に対して、内面の情動を語れないという特徴があると述べてい

る。岩宮（2014）や鍋田（2007）も内面を言語化できない若い人が増加しており、若い世代の人の特徴として言語化のしにくさが挙げられると述べている。また、《聞き手の影響》から不安や緊張感を感じることで〈言語化のしにくさ〉を感じる場合があった。そのため、〈言語化のしにくさ〉には【関係性のプロセス】の中の《「物語り」の共有》が重要になる。《「物語り」の共有》には、聞き手の聴き方により〈言葉にする安心感〉と〈言語化の補助〉の役割があった。言葉にする不安感や緊張感を抱いていた話し手が聞き手の応答により聞いてくれている感覚が得られ、安心感を抱くことができる。また、聞き手が「物語り」を共有することで〈言語化の補助〉の役割を担うことができ、より「物語り」を深めることができると考えられる。

やまだ（2000）は場の雰囲気や状況が「物語り」に影響を与えると述べ、「物語り」を語る場を二者間がどう感じているかが重要であるとしている。そのため、「物語り」を安心して語ることができる雰囲気をつくるのが大切となり、聞き手の「物語り」を聴く態度や雰囲気づくりが密接に関係している。この聞き手の「物語り」の聴き方により〈言葉にする安心感〉の程度が変化すると考えられる。

5-3 《内省》と《「物語り」の共有》

また、《「物語り」の共有》は《内省》にも作用している。《内省》は「物語り」の働きの1つであり、重要な役割である。河合（2000）や榎本（1999）が述べているように、「物語り」が構成されることで「物語り」を経験として自分の中に取り組みことができ、アイデンティティの再確認ができる。構成された「物語り」に対して現在の話し手が再び捉えなおす段階になる。ここでの《内省》の働きにより《意味づけの変化》に移行する場合があるため話し手にとって最も重要な働きであると考えられる。

稲本（2011）は自己変容に対して、聞き手との共有体験的理解が重要としている。また、野村（2014）は他者に「物語り」を開示する過程で自分への語り

に再帰されるとしてした。このように話し手の内省と聞き手との共有体験は相互的に働いていると考えられる。そのため、この段階では構成された「物語り」の共有体験が重要になる。

《「物語り」の共有》には話し手の言語化を促す安心感や言語化の補助の役割があった。ここで、話し手の「物語り」を共に理解し考えていく態度が必要になる。話し手は聞き手と「物語り」を共有する体験によって、より「物語り」を深めていくことができる。しかし、ネガティブなエピソードは聞き手との共有を不安に感じ回避する場合もみられた。「物語り」の構成を途中で放棄してしまうと新しい「物語り」を構成できなくなる。そのため、聞き手は安心感がある空間を心掛け、「物語り」を共有し理解しようとするのが重要になると示唆された。

6. 総合考察

本研究では、「物語り」のプロセスを明らかにし、その中で話し手と聞き手の相互作用がどのように働くのか明らかにすることを目的とした。M-GTAの結果から【話し手の中のプロセス】と【関係性の中のプロセス】のカテゴリーに分けたが相互的に影響していることが示唆された。そして、その中でも《「物語り」の共有》が重要な役割を担っていることが明らかになった。

「物語り」の大切な役割は話し手が「物語り」を構成し振り返ることである。その過程の中で様々なプロセスがあった。このプロセスを辿っていくことが話し手には重要であるが、エピソードの内容や話し手の特徴により妨げられることがある。例えば、ネガティブなエピソードや言語化の困難さを感じていると「物語り」を構成することができない。また、聞き手との関係性も妨げの要因となる。そのため、聞き手の役割として〈言葉にする安心感〉や〈言語化の補助〉など話し手に安心感を与えることが「物語り」のプロセスの中で重要な役割であると考えられた。以上のことから、「物語り」は話し手と聞き手の相互作用の中でプロセスが進んでいくことが明

らかになった。そして、その中でも《「物語り」の共有》が最も重要な相互作用であると示唆された。

7. 今後の課題

本研究では、M-GTAの分析を大学院生2名で行ったが、概念の産出では飽和化が不十分だと考えられる。そのため、今後精密な概念の産出をしていく必要があると考えられる。

また、本研究で聞き手の聴き方の重要性を示唆したように、調査者の要因で結果が変化する場合があると考えられる。今回は「物語り」に対して聞き手が話し手のエピソードを具体的に想像できるように傾聴をしながら聞いていったが、厳密な返答の統制は行っていなかった。そのため、このことを考慮して、今後検討していくことが望まれる。

付 記

本研究は2018年度に仁愛大学大学院人間学研究科臨床心理学専攻に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。調査協力者の皆様とご指導いただいた片畑真由美先生に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 榎本博明 (1999). <私>の心理学的探究 有斐閣選書
- 土居健朗 (2007). 方法としての面接 医学書院
- 河合隼雄 (2002). 物語を生きる—今は昔、昔は今 小学館
- 木下康仁 (2007). 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (MGT) の分析方法 富山大学看護学会誌Vol6 (2) 1-10.
- 稲本和子 横井優子 榎本博昭 (2001). 大学生の自己物語の語りにみられる自己概念の変容 日本性格心理学会第10回大会発表論文,106.
- 岩宮恵子 (2014). 物語未満を支える心理療法① 現代の意識と「物語」 ところ科学,175,81-87.
- 森美保子 福島脩美 (2007). 心理臨床におけるナラティブと自己に関する研究の動向 目白大学心

理学研究,3,147 - 167.

鍋山恭孝 (2007). 変わりゆく思春期の心理と病理—物語れない・生き方がわからない若者たち 日本評論社

野村晴夫 (2014). 生活史面接後の「内なる語り」：中高年の不随意的想起に着目した調査 心理臨床学研究,32,79 - 86.

野村晴夫 (2016). クライエント・ナラティブと心理療法の多元性 大阪大学大学院 人間科学研究科紀要,42,255-272.

坂部恵 (1990). かたり—物語の文法 ちくま学芸文庫

高石恭子 (2009). <高等教育の動向> 現代学生のころの育ちと高等教育に求められるこれからの学生支援 京都大学高等教育,15,79-88.

田中史子 (2016). 物語 (tale) の臨床心理学 “お話” にならないお話がもつ治療的意義 創元社

千田是也 (1987). ことばの感覚 作品社

矢野智司 (2000). 自己変容という物語—生成・贈与・教育 (自己の探求) 金子書房

やまだようこ (2000). 人生を物語ることの意味—なぜライフストーリー研究か?— 教育心理学年報,39,146-161.